

## 『中山世譜』の漂流記事と『歴代宝案』・档案史料

赤 嶺 守

(名桜大学大学院特任教授)

『中山世譜』は首里王府編纂の王家の系譜で、琉球の正史の一つとして知られている。2種存在し、一つは羽地朝秀(向象賢)が著した『中山世鑑』(1650)を蔡鐸が1697年から1701年にかけて漢訳補訂したもので、もう一つは蔡鐸の子である蔡温が1724年から25年かけて重修したものである。首里王府による編修は、その後も続き1876年まで及んでいる。『中山世鑑』を漢訳補訂した蔡鐸本は誤りや欠落が多く、蔡温は父の蔡鐸本のそうした問題を史料に基づき改修しており、信憑性の高い正史として知られている。

清代、多くの島嶼から成り立っている琉球では船を利用した海上交通が発達していたが、暴風に遇い中国に漂着した一般船籍が少なくない。『中山世譜』には、そうした中国に漂着した船舶に関する記録が多く綴られている。そこには漂着年、漂着地、漂着者人数、死亡者数、救済内容及び帰国方法(進貢船・接貢船・原船)等が簡潔に記されている。こうした記録の根拠となったのは、琉球王国の外交文書である『歴代宝案』である。

清代、中国に漂着した人々については、救済費用に「存公銀」といった公費が充てられ、各漂着事案については、皇帝への漂着した各省の総督や巡撫から漂着者の救済に関わる報告が義務づけられていた。中国北京の中国第一歴史档案馆や台湾の故宮博物院収蔵の「宮中档硃批奏摺」や「軍機処档奏摺録副」、中央研究院歴史語言研究所収蔵の「内閣大庫档案」には、そうした総督や巡撫の皇帝への報告書が多く収められており、それらの史料群を「档案」と称している。漂着者は福州琉球館のある福建に送られ、そこから帰帆することが規定されていたことから、福建当局には、

漂着した省や途中護送に当たった各省の関係機関から逐次救済に関わる報告がなされていた。そうした報告に基づき福建布政使は救済の一連の経緯を記録し、琉球国王に知らせていた。それが、『歴代宝案』に咨文として収録されている。

最近の漂着研究では、『歴代宝案』や同時代史料の档案が注目されているが、『中山世譜』の漂着記事においても、王府の編修ならではの着目すべき情報が少なくない。『中山世譜』の記録内容自体は『歴代宝案』に収録されている「咨文」に基づいているが、漂着船については、「那覇府大城馬艦」「泊村比嘉筑登之船」「東村船」といった船の所属や「五端帆馬艦」「十二反帆馬艦」「楷船」「四枚帆船」といった『歴代宝案』や档案には記録されない船の種類や帆装、船のサイズ(船型)等が記されている。そうした情報は帰国後の漂着者から入手したものであろう。さらに漂着者の原船による帰国については、通訳として福州に留学生として派遣されていた勤学が充てられたことを記している。福州における留学生の存在については、王府が中国側に隠蔽していたこともあり、勤学が中国で作成された档案や外交文書である『歴代宝案』に現れることはない。档案史料は、現地における救済の実態を知り得る一次史料であるが、関連案件が全て網羅的に現存しているわけではない。清代における琉球船籍の中国漂着における研究においては、『歴代宝案』や档案史料以外に、『中山世譜』を加えた体系的なアプローチが必要である。今後、そうした研究が深化することにより、漂流漂着の実態がより鮮明にクリエイトされていくことになるであろう。

## 古人たちの言霊

渡 具 知 伸  
(編集刊行事務局長)

“前例にないものを創る”というのは、困難なことを克服し初めて成し遂げられるものであろう。それを踏まえると、これまで過去になかったものを創り上げたパイオニアの事例を見るにつけ、そのすべてについて賞讃と共に畏敬の念さえ抱くほどである。

琉球文学研究が始まって約 120 年を経て、琉球文学をひとまとめにするテキストの制作が名桜大学において 2019 年春に始まった。何もないヤンバルと揶揄された沖縄本島北部地域という辺境の地で、今まさに「琉球文学大系」編集刊行事業(全 35 巻/12 年)という一大文化事業が本学を中心に展開されている。この構想は波照間永吉先生(同刊行事業委員長)が長年思い描いた夢であり、ロマンであったかと思う。氏は研究者としてこの半世紀を琉球・沖縄文化研究に費やし、とりわけ「おもろさうし」研究においては、伊波普猷から外間守善へと続く琉球・沖縄文化研究本道の系譜を継承する“選ばれた人”であり、研究者である。

先生は長く沖縄県立芸術大学に籍を置き、おもろ研究に身を投じておられたが、縁あって 2019 年春に本学の大学院国際文化研究科博士後期課程開設に伴い本学に入職された。大学人として私個人の感想を優先すれば、大学院博士後期課程のスタートも喜ばしいが、それよりも「琉球文学大系」編集刊行事業を本学で開始したことの方がよほどインパクトがあり、壮挙である。だからこそ、その難事業を統括する波照間先生にかかるプレッシャーは半端なものでないことは想像に難くない。なぜなら、これまで誰も成し遂げたことのない全 35 巻の編集すべてに携わり、琉球文学の新しい成果物をつくり上げようとしているのだ。12 年の長期難事業と日々向き合う艱難辛苦の生活はすでに始まっており、事業に係るその困難を常人では推し量

ることなどできない。余人をもって代え難し、という言葉も思い浮かぶ。

視えない力があるとすれば、それは先人たちの発した言霊ではなかろうか。

今に残る多くの琉球文学は古から現代まで口承文芸で伝承されてきた。その永い時間を考えると、先人たちの発した言霊が時空を超えて現代まで連綿と続き、その視えない力と導きによって名桜大学の刊行事業が動き始めたのではないかとさえ感ずる。広大な海域でつながる沖縄本島を中心とする「琉球文化圏」に暮らした古人たちは、琉球諸語をもって独自の琉球文学を今に伝えてきた。

その古人たちはおそらく海に向かって祈りを捧げていたであろう。そのような光景を思い浮かべながら、現代に生きる私は当刊行事務局に携わる者として、二律背反の複雑な気持ちで祈りを捧げている。それは執筆を担当される各委員(学内・学外含め計 28 名)が多忙であることを承知しながら、委員長をはじめ各委員に対して原稿の催促をしつつ、一方では「どうか健康に留意してください」と願う相矛盾する立場にいるからである。私は心の中で 2030 年度までに滞りなく刊行事業が完遂できたことに対し「ありがとうございました」という未来完了形の言葉を発するようにしている。言霊の視えない力を私は信じている。

私の勝手な解釈では、海に向かいニライカナイに祈りを捧げた古人たちの視えない力に導かれたその人物こそ波照間永吉先生、その人ということになる。先に“選ばれた人”と書いたのもそのためである。そして、その波照間先生を招聘し、「琉球文学大系」編集刊行事業を組織決定した名桜大学は“選ばれた大学”といえるかもしれない。

全 35 巻の先陣を切って、2021 年度中に『おもろさうし 上』の第 1 巻が刊行される。

## 2020年度 下半期業務報告

(10月～3月)

### 第1回「琉球文学大系」編集刊行委員会を開催

11月27日、名桜大学にて第1回「琉球文学大系」編集刊行委員会を開催しました。

会議では、令和2年度第1回全体会議（編集・執筆者会議）の実施について、同事業に係るインデザイン担当・編集担当の業務委託について、令和3年度事業計画について、話し合われました。



編集刊行委員会の様子=27日、名桜大学本部棟第1会議室

### 第1回「琉球文学大系」全体会議（編集・執筆者会議）を開催

12月5日（土）、沖縄産業支援センターにて第1回「琉球文学大系」全体会議（編集・執筆者会議）を開催しました。当初は6月の開催を予定していましたが、新型コロナウイルスの流行に伴い9月に延期。9月も感染拡大が止まらず再延期を余儀なくされ、12月に開催となりました。

当日は、学内・学外合わせて計13名の委員にご出席いただき、2021年度から2023年度までの刊



全体会議の様子=5日、沖縄産業支援センター・大ホール

行計画について話し合われたほか、琉球文学大系の基本的な書式や巻別ごとの進捗状況についての確認が行われました。

### 第1巻「おもろさうし（上）」版下制作を(株)沖縄高速印刷に業務委託

12月、第1巻「おもろさうし（上）」の版下制作を沖縄高速印刷株式会社（南風原町）に業務委託することが決定し、正式な契約書の取り交わしが行われました。

7月の業者選定にはじまり、業務委託に係る細かな契約条項の調整に約6ヶ月もの時間がかかりましたが、この業務委託の締結は本事業にとって大きな一歩であります。現在は、「おもろさうし（上）」に収める巻三までの原稿の入稿が終わり、初校の編集作業に入っているところです。



業務委託内容に関する打ち合わせの様子=11月28日、(株)沖縄高速印刷本社会議室

### 本永清氏採集音源資料調査を実施

11月18日、第7巻「琉球歌謡一宮古篇（上）」に収録予定の本永清氏採集音源資料に関する悉皆調査を同氏宅にて行いました。本永氏は、宮古島のご出身で、高校教員時代より宮古各地を訪ね調査を重ね、そこで採集してこられた貴重な音源を多く保管しております。今回は、主に1960年代から70年代にかけて収録された宮古島狩俣の神歌の音源資料の数と状態（オープンリールテープ22本、カセットテープ40本）を確認しました。次年度以降は、音源資料の修復作業を行い、デジタル化へ向けた作業に取り組む計画を予定しています。



## 北琉球のうた探訪—解釈と鑑賞 (3)

生り年の祝儀ぐわいにや (伝承地：座間味村座間味)

ムムトウ ユ ハクサ ユ ミ  
百年までい 読みんか 百歳までい 読み満ちら  
アヤザバニ サ シルザバニ ミ  
綾差羽 差すまでいん 白差羽 生ゆるまでいん  
チ  
うすぐさん 突ちゅまでいん  
サ  
みゆぐさん 差すまでいん 【『南島歌謡大成 | 沖縄篇上』クエーナ100】



写真：頭に羽が生えた多良間島の長者

【訳】百年まで数えていこう、百歳まで数え上げよう  
綾模様の羽を差すまでも、白い羽が生えるまでも  
石のような杖を突くまでも  
立派な杖を差すまでも (長寿にあらせてください)

上記の歌詞は、座間味島に伝わる神歌の一節である。歌全体の内容は「正月を迎え、今年はこの家の貴人の生まれ年なので、神人が火の神の前に供物をそなえて、一年間の厄を返し、天上他界に祈って幸運を引きつけよう。百年・百歳まで数え上げよう。綾模様の羽・白い羽が生えるまでも、立派な杖を突くまでも長寿にあらせてください」というもの。61歳以上の者がいる家では、正月五日までに神人を招いて祈祷を行い、その後この歌をうたうという。生まれ年にあたる人の長寿を祝福する歌である。

琉球の人々は、長寿のしるしとして“からだに羽が生える／生え変わる”と表現した。大宜味村一帯に伝わる神人就任儀礼の歌にも同様の表現はみられ、そこではさらに「身体に石や金のような老斑ができるまで、石や金のような杖を突ききるまで」と、凄まじい命の長さを喩えた言葉が重ねられている。それを具現化したものが多良間島の八月踊りにみえる。舞台演目のはじめに上演される芸能<長者の大主>に登場する長者は、まさに長い鬚を垂らして、杖を突き、頭に美しい羽の生えた老い人の姿である (写真参照)。

ところで、中国の古代信仰には、からだに羽が生え仙人となって天にのぼるとする羽化登仙の思想がある。『列仙伝』(後漢の桓帝以降の成立) や『抱朴子』(317年成立) などには、長寿を得ようと仙道を極め、修行後に神に近い存在になった人々の話が伝えられている。その中で、修養を得て神格者となり不老長寿を体得した状態を“からだに羽が生える”とあらわしており、先の表現とのつながりが窺える。

琉球では、そのほか長い時間ある状態が続くことも先の表現を用いて語られた。大宜味村喜如嘉の<柴差しのウムイ>では、美しい羽が生え変わる遠い未来まで村を創建当初の理想的な状態にあらせてください、とうたう。ちなみに、南琉球の宮古・八重山の歌では、喜びの気持ちをあらわす際にも“からだに羽が生える”と喩えていた。(石川恵吉)

### 2020年度 寄付者一覧

本年度は下記の個人と企業より多くの寄付をいただきました。厚くお礼申し上げます。

【個人】大城 誠 大城真理子 渡具知伸 宮城真也 (五十音順・敬称略)

### 2020年度 図書寄贈者一覧

本年度は下記の個人と機関より貴重な図書資料の御恵贈がありました。厚くお礼申し上げます。

【個人】高良文雄 渡具知淳子 長浜清俊 宮城都志子  
【機関】名護市教育委員会市史編さん室 (五十音順・敬称略)

### 「琉球文学大系」関連記事目録—2020年10月～2021年3月

波照間永吉「大城立裕さんと『琉球文学大系』」『名桜大学図書館報 Bibliotheca』第32号(名桜大学附属図書館,2021,3)

山里勝己・波照間永吉・佐藤優発言「第1部 国際シンポジウム「琉球諸語と文化の未来」」、波照間永吉・小嶋洋輔・照屋理編『琉球諸語と文化の未来』(岩波書店,2021,3)

### 各巻担当委員の皆様へ 次回の全体会議(編集・執筆者会議)開催のお知らせ

令和3年度第1回全体会議(編集・執筆者会議)は下記の日程での開催を予定しています。日程調整のほど宜しくお願ひ申し上げます。なお、新型コロナウイルスの感染拡大状況によっては日程と場所に変更が生じる可能性がございますので、5月中旬を目途に判断し、改めて事務局からお知らせいたします。

開催日程：2021年7月3日(土) 14:00～予定 開催場所：名桜大学